

ユベール・モンテイエ論

——『ネロポリス』刊行の周辺——

榎 木 泰

Essai sur Hubert Monteilhet

—autour de la publication de *Néropolis*—

Yasushi Tochigi

はじめに

独特の作風により現代フランスを代表する推理小説の書き手としてすでに地位を確立した作家が、生涯のテーマとして少年時代より温め続けた壮大な歴史小説を満を持して発表し、フランス読書界に衝撃を与えた。本稿は、『ネロポリス——ネロの時代の物語 (*Néropolis—Roman des temps néroniens*)』の刊行を契機として再び脚光を浴びつつある作家ユベール・モンテイエ (Hubert Monteilhet, 1928—) の新たな観点による分析と評価を試みるものである。

1. 『ネロポリス』以前の作家活動と作品の評価

チュニス (Tunis) のリセ (Lycée Carnot) で歴史と地理の教師をしていたユベール・モンテイエは、処女作 *Les Mantes religieuses* (Editions Denoël, 1960) により1960年度フランス推理小説大賞 (le Grand Prix de la littérature policière) を獲得し、作家としてのデビューをはなばなしく飾った。抑制された知的で辛辣な文体、人間の心に潜む悪を見据える醒めた目、カトリシズムと宗教・神学論、シニカルなアフォリズムとブラック・ユーモア、森羅万象に及ぶ博識は、一作にしてたちまち、モンテイエに独特な推理小説の書き手としてフランス文壇における確乎たる地位をもたらした。

以後モンテイエは、1980年まで平均年1作の割合で推理小説を発表していく (本稿末著作リスト参照) が、それらはいずれも *Les Mantes religieuses* と共通の手法をとり、類似のキャラクターが登場する同じ傾向のミステリーである。いずれも、犯人あるいは被害者など、事

件の当事者が語り手をつとめる書簡もしくは手記形式の小説であり、したがって「……犯人探しの興味はもはや問題外となる……そして、もっばら、犯行の動機とか、犯罪の背後にかくれたこまかいいきさつとかが興味の中心にすえられる¹⁾」。また、「本書 (*Le Forçat de l'amour*) で言えばクロード、『かまきり (*Les Mantes religieuses*)』のベアトリス・マンソーとポール・カノヴァ夫人、『帰らざる肉体 (*Le Retour des cendres*)』のエリザベートとファビエンヌ等、一筋縄ではいかぬ権謀術数、深情けの悪女賢女が登場して大活躍する²⁾」のもモンテイエの特徴である。

だが、最大の、そして議論的となる特徴は、宗教の問題、あるいはカトリシズム的善悪観である。上述のように、謎解きを二次、ないし無視したモンテイエは、推理小説という形式を借りて「人間の悪の深淵をのぞき込む」作品を書いたのであり、「悪の形而上学」が「作品の世界に深みを与えている³⁾」のである。それゆえに、「ちょっと理屈っぽい部分が入り……少し退屈」だったり、「ちょっと生硬」で、「ふつうの読者は、ちょっとしんどい」という評が生まれたり、逆に、「インテリ相手の知的な遊び」であって、「いわゆるカトリック作家、たとえばモリヤック (François Mauriac) とか、ベルナノス (Georges Bernanos) などの悪の認識に比べますと浅いと思⁴⁾」われたりすることにもなるのである。

しかし、いかに知的で高尚であろうと、所詮ミステリーはミステリーであって、純文学とは関係がないとすれば、以上の議論はほとんど意味をなさない。筆者は「推理小説という形式を借りて」と書いたが、モンテイエ自身の推理小説執筆の動機はどのようなものだったろうか。

1928年生まれのエベール・モンテイエは現在、スペイン国境に近いフランス南西部の中都市ダクス (Dax) に居を構え、作家活動を続けているが、かつてはチュニスに約10年間住み、5人の子供を養うリセの教師であった。「わたしは若くして所帯をもったので、十分な生活費を得るために小説を書くことにしました。推理小説を選んだのは、そのほうが易しそうに見えたからです⁹⁾」と、のちにモンテイエは述懐している。やはり『ネロポリス』が評判になったあとのあるインタビューにおいて、彼はこう説明している。「30代になってから推理小説を書き始めたのは、大事をとってのことでした。はたしてわたしにスタンダール (Stendhal) の作風を取り入れる力があるかどうか、つまり自分の『吃水』を知りたかったのです⁹⁾」。

推理小説プロパーの作家が聞いたら激怒しそうなコメントであるが、彼には思ったとおり易しかったのか、試しに書いた伝統的なミステリーの殻を破る斬新な作品でみごとに大賞を射止めたのである。続いて翌年刊行した *Le Retour des cendres* も第1作に劣らぬ秀作で、トンブソン (J. Lee Thompson) により早速 *Le démon est mauvais joueur* の題名で映画化された。

こうして、モンテイエは「たちまち批評家たちから推理小説貴族とか、辛口で傲慢な短編の作家、要するにニミエ (Roger Nimier) 風に推理小説を書く作家という烙印を押されてしまった⁹⁾」。1980年までほぼ年1作のペースで発表した推理小説 (すべて Editions Denoël) は、ラシーヌ (Jean Baptiste Racine), コルネイユ (Pierre Corneille), ド・ラクロ (Pierre Choderlos de Laclos), ド・クインシー (Thomas De Quincey) らの古典作家から借りたテーマを20世紀に置き換えた状況設定といい、危険な言辞を吐く聖職者だの、寛大で無能な大学教授だの、偏見によって裁く陪審員だのを含む登場人物の性格付けといい、特異かつ説得力をもつ法律問題から神学論争までの博識と形而上学的議論による肉付けといい、いずれも入念に構想された傑作ばかりである。モンテイエのほぼすべての作品にみられる偽善的な良識に対する作者の揶揄の激しさゆえか、悪ふざけ、不謹慎、猥褻という非難もあったが、次々に生み出される作品は世界的な成功を収めていった。モンテイエはそれとともに教職を辞してフランスに帰国し、ダクスに身を落ち着けると、執筆と読書と資料渉猟との本格的な作家生活に入った。

しかしその一方、ポウエル (M.-C. Pauwels) の指摘するとおり、「この小手調べの一打は彼に多少欲求不満をも感じさせたにちがいない。彼の推理小説は文体からいっても状況設定からいっても、冒険小説であると同時に

に歴史小説である⁹⁾」からである。

2. 『ネロポリス』に対するフランス読書界の反応

1984年夏に Julliard/Pauvert から刊行されたモンテイエの長編歴史小説『ネロポリス』は多くの意味でフランス読書界を驚嘆させるものであった。事実、フランス主要紙誌の書評は異口同音に「驚嘆」の形容詞を並び立てた。なかには *La Voix du Nord* のように冒頭から形容詞を陳列した書評もある。「Pyramidal, époustoufflant, gigantesque, faramineux, colossal, formidable, stupéfiant, fantastique, vertigineux, délirant, prodigieux, fabuleux, inouï, sidérant, terrifiant, fascinant, tonitruant, <enbaumé>, comme gueulait Flaubert⁹⁾」。ヴァンドローム (Pol Vandrome) は *Le Rappel* 誌上で「次から次へと驚くことばかり。まったく予想もしなかったすばらしさである……¹⁰⁾」と彼の「驚きぶり」を表わしている。また *Ouest-France* のカントレック (Charles le Quintrec) のように、「どういふものか、読む前からある程度覚悟して『ネロポリス』に読み耽ったのだが、驚きと衝撃をまぬかれなかった¹¹⁾」評者もいる。

では、批評家たちは『ネロポリス』のなにに驚き、衝撃を受けたのだろうか。まず、そのボリュームがある。ある批評家に出版社から送られてきた献本には「サイズといい、重さといい、大変な本¹²⁾」ですが、よろしく、というメモが添えられていたという。しかし、739ページにわたる書簡と記述を中心にした長い段落の文章からくる物理的な長大さの印象が一般読者をしてこの長編小説への挑戦を逡巡させるに十分であるとすれば、中身のあらゆる意味での濃密さは果敢にも読み始めた読者の決意を挫折させるに足るほどである。

モンテイエの博覧強記と蘊蓄を傾ける癖とは、「小手調べに」、また「十分な生活費を得るために」書いた推理小説群においてすでにこの作家の一つの特徴となっていた。とすれば、彼が満を持して書いた長編歴史小説の中で、百科事典的知識を思う存分披露したとしても不思議はない。それらは歴史小説の時代背景として、より強い必然性をもち、したがって単なるペダントリーと受け取られる恐れが少ないからである。だが、そこに開陳された碩学の幅広さは、彼の推理小説を読んだことのある批評家たちをも驚嘆させるものだった。

モンテイエが『ネロポリス』の中で解説しているテーマを項目別に分類するとおおよそ次のようになる。

a) 日常生活と社会

- ・市場, 商店, 買い物
- ・食料品——青果物, 獣肉, 魚介の種類と供給形態
ブドウ酒の種類, チーズの種類と製法, 干しブドウの製法, フォワグラの製法, パンの製法, 菓子の焼き方, 魚汁の作り方
- ・各種居酒屋の店内構造と営業状況
- ・住宅の構造, アトリウムの設計, 賃貸アパートの構造, 経営, 管理, 賃借人の実態, ごみ処理
- ・衣服, 履物, トガの種類と着付け
- ・結婚——結婚形態の種類, 結婚契約, 後見人の役割, 持参金
- ・命名法, ローマ人の姓名
- ・既婚女性の生態, 捨て子と子供の状況
- ・奴隷の実態
- ・葬儀と埋葬
- ・医療, 民間療法と薬剤
- ・給水設備
- ・ローマ暦, ローマ時間, 時計の種類
- ・教育——初等, 中等教育のカリキュラム, 教師と学校, 家庭教師の実態
- ・数学, 数の数え方
- ・ラテン語文法と発音, ギリシア語学習と『イーリアス』の暗唱
- ・手紙——書き板と鉄筆, 封印
- ・郵便制度
- ・運動競技, ギリシア式スポーツ競技会
- ・共同浴場の歴史, 構造, 利用の実態
- ・公衆便所の歴史, 構造, 利用の実態

b) 政治, 経済, 法律, 軍事

- ・ローマの政治家, 伝説上の人物に関する情報
- ・物価水準, 貨幣制度, デノミ
- ・税制, 財政改革
- ・流通, 輸送, 外国貿易
- ・都市計画, 海上・陸上交通
- ・職人, 労働者の待遇, 給料, 保険, 共済組合
- ・養子縁組の手続き
- ・奴隷に関する法律, 解放の手続き
- ・保護者と被護民の関係
- ・裁判制度, 民事, 刑事訴訟例
- ・牢獄, 処刑法, 拷問, 十字架刑の規則と方法
- ・弁護士の仕事と収入
- ・親衛隊, 消防, 夜警
- ・ゲルマニア駐屯軍の実態
- ・ゲルマン人諸部族の実態

・ガレー船の種類と漕手の配列

c) 宗教と文化

- ・ギリシア, ローマの神話
- ・ローマ人の信仰, 祝祭, 儀礼, 行事
- ・パンテオンの歴史, 構造, 性格
- ・ヴェスタの巫女——制度, 性格, 実態
- ・占い——鳥卜, 腸卜, 占星術, 手相, 夢占い
- ・ユダヤ教——律法, 教義, ユダヤ人の実態
- ・割礼——意味, 種類, 方法
- ・神学と死生観——輪廻転生説, 復活, 終末論, 多神教, ユダヤ教, キリスト教, 仏教の思想と教義
- ・初期キリスト教——旧約聖書, 福音書, 使徒行伝, 書簡集, 黙示録に関する議論
- ・七十人訳聖書, ウルガタ聖書
- ・言語論——ヘブル語, ギリシア語, ラテン語, アラム語
- ・ギリシア哲学, 修辞学, 音楽理論, 音響学
- ・美学, 絵画論 (画材と制作論), 彫刻論, 作詩論, 演劇論, 建築論 (劇場の構造), 庭園の設計
- ・図書館の構造
- ・書店の構造と役割, 写本と製本の方法
- ・ペテロとパウロの殉教に関する伝承と史料

d) 皇帝, 宮廷, 貴族

- ・歴代皇帝に関わる史実とエピソード
- ・著名貴族に関わる史実とエピソード
- ・元老院議員の実態
- ・アテナイ留学制度と青年兵学校の実態
- ・宴会——席順, 座り方, 進行, 祝宴の種類と様式
- ・料理——材料, 調理法, メニュー
- ・グルメの会 (アルヴァレス祭司団と供儀)
- ・皇帝の行幸と随行団の実態
- ・カンパニアへの旅と道中風景, リゾート地の実態
- ・専制君主論

e) 娯楽と風俗

- ・見世物——戦車競走, 剣闘技, 野獣狩り, 模擬海戦, 処刑劇の方法, ルール, 戦術, 競走場と闘技場の構造, 観衆の実態
- ・剣闘士——剣闘士の種類, リクルート, 契約, 報酬, 合宿所, 訓練, 武器, 生活
- ・馬の飼育, 蹄鉄の種類と用途
- ・ポルノ演劇——脚本, 演出, 俳優, 身代わり役
- ・売春と売春施設——種類, 方法, 値段
- ・倒錯した性——男色, 少年愛の意味, 思想, 方法,

女性同性愛, 近親相姦, 性的虐待, 獣姦

- ・乱交パーティ
- ・夫婦, 男女間の道徳
- ・自殺の思想と方法

まさに森羅万象, 細大漏らさず, である。小説の時代背景となる社会を宗教思想から好色な風俗までこれほど綿密詳細に解説・描写した作品がほかにあったらうか。

『戦争と平和』や『クォ・ヴァディス』のような世界文学史上に燦然と輝く文豪の名作古典でさえ, これほど徹底網羅してはいない。この事実だけでも, 『ネロポリス』は1984年夏のフランス読書界を震撼させるに十分であったといえよう。

批評家たちを驚嘆させたモンテイエの博識は, リセの歴史教師という職業の副産物ではない。彼の古代ローマへの関心については後述するが, もっと根深いところがあり, すさまじいエネルギーが資料・文献の読み込みと調査に費やされた。たとえば, 『ネロポリス』の冒頭に出てくるカリグラ帝による剣闘士競売のエピソードの出典はスエトニウス (Suetonius) の『ローマ皇帝伝』であり, 『ネロポリス』の全編を通じて剣闘技に関するありとあらゆる情報が提供されるが, モンテイエ自身の説明によれば, ジョルジュ・ヴィル (Georges Ville) の *La Gladiature en Occident* がその供給源である。その他, 彼の歴史的記述の正確さは専門の古代史研究者たちが保証している。

ベルンスタイン (Michèle Bernstein) はモンテイエの「史実と紀元1世紀ローマの日常生活に関する記述はきわめて正確である (これは専門家がそう指摘しているし, 筆者自身もそう思う) ……」¹⁸⁾と述べている。グリマル (Pierre Grimal) は次のように断言する。「一切が史実どおりに置かれている。ネロ時代のローマの記念建造物もこの都の地図上に正確に配置されており, 家々の窓からはそれらが当然見えるべき正しい方向にちゃんと見えている。マルスの野にあるアグリッパの庭園は少し大きすぎないか。いや, 最近発表されたコアレッリ (F. Coarelli) の研究は, これらはいずれも一般に考えられているより広がったことを立証している¹⁹⁾」。また, 古代ローマ史学者の弓削達は「……歴史小説の基本的条件は歴史的考証の正確さであろう。その点にかんしては, 本書 (『ネロポリス』) は明らかに百年のローマ史研究の進展を反映しており……」¹⁵⁾と書き, やはり正確さを保証している。

第二ヴァティカン公会議推進派の愚行や潜在的推進派の放埒ぶりを激しく批判する論文 *Rome n'est plus Rome* (Jean-Jacques Pauvert) を発表して話題となった

モンテイエは, その後, 18世紀スペインの宗教裁判を扱った小説 *Les derniers feux* を1982年に『ネロポリス』と同じ Julliard/Pauvert コンビから出版した。綿密な史料研究に基づくモンテイエの歴史的記述の豊富さと正確さについて『ネロポリス』以前にすでに定評があったとすれば, 宗教と神学に対する彼の関心の強さと造詣の深さは, 初期の推理小説群にも垣間見るとはいえ, 『ネロポリス』の発表によってにわかに, そして圧倒的に注目を集めることになったのである。ギリシア・ローマの神々と皇帝から平民までの古代ローマ人の信仰, ユダヤ教とユダヤ人の思想と生活, 旧約・新約聖書と初期キリスト教, さらにバラモン・仏教の思想や死生観へと発展するモンテイエの議論は, さながら宗教事典の感がある。とくに聖書に関しては, クイズのタネ本とはいわむまでも, まさに話題の宝庫である。

それらが最も象徴的に表れている箇所を1つ挙げるとすれば, パウロとペテロが物語の主人公カエソ (Kaeso) 青年とローマの公衆便所の便座に並んで腰掛けたまま神学論争を展開する場面であろう。モンテイエはローマ世界に伝道を始めた実在の使徒たちに厳粛かつ神聖なイエスの福音とキリスト教の教義を語らせる一方で, 便器の構造や排泄後の始末の方法をこと細かく解説する。これだけでも並大抵の手腕ではない。

まだまだ驚くべきことはある。正確な時代考証による歴史的記述と深い学識に基づく宗教・神学論争を展開してみせた「おかしな小帽子をちょこんと頭にのせたオクスフォード大学の古代史学科で教鞭をとる姿を想像するほうがふさわしい¹⁶⁾」作家が, 臆することなく描写した背徳と倒錯の性と, 読者をさえ食傷させる美食悪食の大饗宴がそれである。ちなみにモンテイエは *SODimanche* に料理記事を定期寄稿する食通でもあり, ネロ時代のローマのマトロナたちと違って, 自ら厨房に立って料理をすることも珍しくないという。まさに「この現代のサルスティウス (Sallustius) にとっては仕事も食事も同じことで, 飽くことを知らぬすさまじい感覚的快楽と健啖ぶりとは, 国立図書館の難解な著作物と子牛の腎臓とに同時に向けられる¹⁷⁾」のである。

3. 『ネロポリス』執筆の動機

モンテイエが『ネロポリス』を書いた動機はなにか。これについては, 彼自身が何度かのインタビューで明快に語っている^{18), 19)}。

まず, 彼はネロ時代のローマに早くから関心を抱き, 知識を貯えていたのであるが, その理由として本人が挙げているものを要約すると, 次のようになる。

- a) イエズス会学校でラテン語を学んだ。
- b) イエズス会学校の学生時代にシェンキェヴィチ (Henryk Sienkiewicz) の『クォ・ヴァディス(Quo vadis?)』を読んで感動し、触発された。
- c) 師事した、もしくは影響を受けた歴史学者がたまたまローマ史の専門家だった。
- d) 作家活動を始める前、10年ほど住んでいたチュニスには古代ローマの遺跡があり、彼の夢とイマジネーションをふくらませた。

そして、ついに「彼自身のクォ・ヴァディス」を書く決意をしたのだが、その理由はこうである。

- e) 敬虔なカトリック教徒として、ローマ世界への伝道と初期キリスト教に関心があった。
- f) ユダヤ人の世界や、ユダヤ人と初期キリスト教徒との関係に興味をもっていた。
- g) 『クォ・ヴァディス』に書かれていないものを書き、またそれ以後のローマ史研究の成果を取り入れてこの名作を補強したいと思った。
- h) 今日のフランスの状況にネロ時代のローマと共通するものがあり、この小説を書く必然性を感じた。
- i) ジョルジュ・ヴィルの労作論文 *La Gladiature en Occident* を読んで、作品のプロットがひらめいた。
- j) 出版社からの執筆依頼と、好条件の提示があった。

実際、モンテイエは、『『ネロポリス』は不思議なほどさまざまな状況が重なりあって生まれたのです²⁰⁾』と語っている。しかし、その執筆動機の根底には、彼が「常日頃、ローマ人の安逸な暮らしぶりに強い関心をもっていました。原罪によって墮落した人間性の極致がそこにあるからです²¹⁾』という単純明快な思想があったのである。

ところで、『クォ・ヴァディス』に書かれていないもの』とはなんだろう。ポーランドの国民作家シェンキェヴィチが1895年に発表したこの長編歴史小説は、世界の約30カ国語に翻訳出版され、文字通り世界中で読まれているとはいえ、彼がそれ以前に発表したポーランド史に取材した3部作の延長上にある民族的・宗教的情熱の産物であった。モンテイエは、したがって、「シェンキェヴィチは特定の時代の読者を対象に書いたため、ローマ人の生活を理解するうえできわめて重要である多くの問題を扱うのを避けている。たとえば、ホモセックス、ユダヤ人問題はもちろん、奴隷制、ローマ人の結婚

観がそれである²²⁾』と説明している。

実際、モンテイエは『ネロポリス』の全編にわたって奴隷制、結婚（もしくは夫婦と家庭の実情）、ホモセックス、ユダヤ人問題について、さまざまな角度から解説し、論じている。『クォ・ヴァディス』に欠けていて、『ネロポリス』によって「補強」されたテーマはほかにもあり、それは「元祖」が書かれてから90年の間の考古学的調査の成果や古代ローマ史研究の進歩を考えれば、当然のことである。しかし、モンテイエが指摘した4つのテーマについてシェンキェヴィチが触れなかったのは、必ずしも史料がなかったからばかりではない。ポーランドに限らず、当時の文学観からしても、社会状況あるいは通念からしても、これらは扱うのをはばかるべきテーマだったからである。

それから約1世紀後のフランスにおいて、モンテイエは「新クォ・ヴァディス」を試み、奴隷制（奴隷の法的地位、義務と権利、性的虐待の実態）、結婚（既婚女性——「主婦」では決してない——の自由奔放な生活ぶり、その歴史的原因および社会的影響）、ホモセックス（男色・少年愛のみならず、およそ考えられるありとあらゆる、あるいは考えられないような極端な倒錯した性のかたちと、その美学的・生理学的意味）、ユダヤ人問題（ローマ世界におけるユダヤ人の法的地位、新興のキリスト教徒に対する態度、ユダヤ教の教義）を存分に論じた。

ところが、この4つの要素はそれぞれ独立したテーマではなく、じつは互いに関連性をもって帝政ローマ時代の家庭の崩壊、道徳の荒廃、キリスト教の伝播へとつながっていくのである。近隣国から拐かされてきたサビニ人女性たちが家事一切をしないことを条件にローマに止まるのを承知して以来、ローマの既婚女性は家事どころか、子供を産み育てることさえしなくなった。上流会社の結婚形態には、妻の権利が異常に強く、妻が望んだ場合のみ同食するというものさえあった。奴隷は比較的優遇されており、法律による解放の望みがあったが、なにもしない「主婦」の代わりとして、男女ともに厨房だけでなく閨房での奉仕もしなければならなかった。

キリスト教以前のローマでは社会秩序を乱すものが道徳的罪であり、ホモセックスを初めとして倒錯した性は、市民同士では死に値する重罪であったが、奴隷を相手にするなら、なんの問題もなかった。ローマが奴隷を補給するために次々と戦争を起し、結果として世界征服を成し遂げたとさえいわれる所以である。だが、ギリシアでごく自然のことと見なされていたホモセックスは、ローマでもヘレニズムかぶれの芸術家皇帝の下で急

速に普及していった。それは、既婚女性が子供を産みながらいない状況と結びついて、出生率の低下をもたらし、為政者たちが講ずる苦心の出産奨励策にもかかわらず、家庭の崩壊と社会秩序の混乱をもたらす原因となった。

一方、ユダヤ人は唯一神との契約に基づく厳しい道徳律を守り続けていたが、彼らはあくまで選ばれた民である仲間うちに信仰を閉じこめ、異教徒の世界にまで布教する考えはまったくなかった。ローマ皇帝にしてみれば、ユダヤ人とその信仰はローマの秩序を乱す恐れがないため、彼らには皇帝に対する供犠を免除するという特権を与え、居住区に保護した。これに対し、すべての人類にその教義と道徳を適用しようとするキリスト教の勃興は、ローマとは相容れぬものであり、キリスト者はやがて放火犯としてスケープゴートにされる運命であった。

いささか3題話ならぬ4題話めくが、以上のような背景を克明に描写するのは、たとえそのために残酷、悪趣味、ないし卑猥に陥ったとしても、この作品にとってきわめて必然性のあることであり、その結果、「敷衍され、深く掘り下げられ、過度の羞恥心から解放された『クォ・ヴァディス』へと発展し²³⁾」て、モンテイエの目的は達せられたのである。一方、ユダヤ系の *Information juive* は、ユダヤ人に対する画一的な見方は反ユダヤ主義を助長する危険があると批判したうえで、『ネロポリス』はたしかに「もう1つの『クォ・ヴァディス』であるが、シェンキェヴィチ風でも、キリスト教化するものでもなく、冷笑的、懐疑的、虚無的でさえある²⁴⁾」と、モンテイエがユダヤ人問題を扱うのをはばからなかったせいか、否定的評価を下している。だが、これは特殊な例外とみるべきであり、「セザンヌ (Paul Cézanne) の『サント・ヴィクトワール山』がこの山を描いた他のすべての絵画を顔色なからしめたように、グロスマン (Wassili Grossman) の『人生と運命』は『戦争と平和』を、そして今、『ネロポリス』が『クォ・ヴァディス』を顔色なからしめた²⁵⁾」のである。事実、フランスでの書評の大多数が、『ネロポリス』のほうが強烈であり、現代の読者にとっては少なくともおもしろく、退屈しないで読み通せると、異口同音に断言している。

4. 「新クォ・ヴァディス」の今日的意義

これまでに、『ネロポリス』が『クォ・ヴァディス』に鼓舞されて書かれた歴史小説であること、正確な時代考証に基づいていること、『クォ・ヴァディス』を補強して新たに書き直すという著者の目的が達成されている

ことを検証してきたが、この小説は現代のフランスにおいて刊行される意義があるのだろうか。つまり、なぜ、今また『クォ・ヴァディス』なのか。

シェンキェヴィチは第1次大戦中、祖国ポーランドの独立運動を戦った民族主義者であり、『クォ・ヴァディス』以前に発表したポーランドの歴史に基づく3部作『火と剣をもて (*Ogniem i mieczem*)』(1885)、『大洪水 (*Potop*)』(1886)、『ヴォロディヨフスキー氏 (*Pan Wolodyjowski*)』(1887)では、「コザック騎兵やスウェーデン軍、トルコ軍の侵略に対する人々の壮烈な抵抗を描き、祖先の力強い姿を通じて民族感情を覚醒させ²⁶⁾」た。そのシェンキェヴィチは『クォ・ヴァディス』において「やがてキリスト教倫理の支配する次の時代が到来する確信をヴィニキウスの回心を軸に読者の心にきざみつけるとともに、「暴君」ネロへの罵倒をペトロニウスの口を通して語らしめることによって、ツァーリの圧制下に苦しむ十九世紀のポーランド人に、自由と解放の輝かしい希望を与えるものとなった²⁷⁾」のである。

それでは、市民革命と人権宣言200年祭を派手に祝い、近代建築の粋を結集したアルシュでサミットを開き、全世界に国威を誇示する今日のフランス（厳密には、その5年前）の状況はどうか。まず、結婚しない女性ないし子供を産まない女性の増加、墮胎の横行、同性愛と倒錯した性の氾濫、その結果としての家族もしくは家庭の崩壊、出生率の低下が深刻な社会問題になっている。煽動された浪費と飽食、さらには公営ギャンブルと公認ポルノと放任売春との、退廃した風俗と墮落した倫理の世紀末の様相。ひとりフランスに限らず、日本をも含めた先進工業国に多かれ少なかれ共通する現代社会の病状であるが、これを紀元1世紀のネロ時代のローマ社会のアナロジーとするのは決して牽強付会ではあるまい。おそらく、『ネロポリス』の読後にそれを思わぬ者は少ないだろう。次にあげる *Les Echos* に見られるように、フランスのほぼすべての書評がこのアナロジーを指摘するとともに、本書を現代社会への警鐘と捉えている。「著者も出版社も……この異様な長編小説の中に、『新たな放火犯ネロ』が『エピクロスの子孫』を弄び、もしかしたら黙示録が差し迫っているかもしれない今日のフランスへの当て付けを見たがっているのだ²⁸⁾。」

パンとサーカスはいつの時代にも政略や陰謀から民衆の目をそらせるために為政者がとる常套手段である。モンテイエ自身もこの点について次のように語っている。「サッカーその他のスポーツを初めとして競馬と場外馬券、各種のショーに宝くじ。フランスは再びローマとよりを戻しつつあるのです²⁹⁾」。もちろん、サッカーと円形闘技場での剣闘技を対比するわけにはいかないが、現

代の性と暴力の氾濫する映画は古代ローマにおいては民衆の暗い情熱を煽り立てたポルノ演劇であり、キリスト教徒のみが「サーカス」を非難したのである。

『クォ・ヴァディス』がロシア占領下のポーランド民衆を「キリスト教倫理の支配する次の時代が到来する確信」という宗教的情熱により奮い立たせようとしたとすれば、モンテイエは『ネロポリス』によって20世紀末のフランス社会がキリスト教的道徳を取り戻す必要性を説いたのだろうか。もしそうであるとすれば、そのことは『ネロポリス』の中にどのように表われているのだろうか。

ローマの為政者はパンとサーカスによって民衆の関心を政治からそらせることはできたが、彼らの心の空白を満たすことはできなかった。そこにキリスト教が普及する素地があったのであり、ローマによる物的世界制覇に代わるキリスト教による精神的な世界制覇があった所以である。「現代人もまた不安を抱えています」とモンテイエはルクレルク (Michel Leclercq) の質問に答えている。「罪深き者は陽気にはなれないからです。そこに、生きるためにはより高い次元に呼びかける必要のある人間の基本的な不安があるような気がします。はたしてキリスト教は再び答えをもたらすことができるかとなると、おそらくむずかしいでしょう。いまのところ、人びとはキリスト教的道徳を望まないからです。それだけに危機は重大なのです³⁰⁾」。

『ネロポリス』の主人公カエソは復活を初めとするキリスト教の教義、男女間の新しい道徳律の矛盾や不合理を指摘して、パウロら使徒たちを論理的に追い詰めるだけでなく、パウロをだまして信仰のないままに洗礼を受けた。そのカエソがローマ放火犯のぬれぎぬを着せられたキリスト教徒の1人として断頭台に昇るまで回心の言葉を発することなく、物語は終わっている。『ネロポリス』ではキリスト教はかなり悪辣な揶揄の対象にされており、カエソにかかれば、いやモンテイエにかかれば、イエスもペテロもパウロも滑稽な3枚目にされてしまう。ユダヤ人もまた、容赦なくからかわれる。その無遠慮ぶりはアンチ・セミティズムを助長すると非難されるのも無理ないと思えるほど徹底している。わずかながら引き合いに出される仏教の輪廻転生思想でさえ、モンテイエの毒牙を免れない。

もっとも、『ネロポリス』では歴代皇帝はもちろん、セネカやペトロニウスも含めて、罵倒されるか、けなされるか、笑いものにされるかしていない個人ないし集団ないし宗派は一つとしてない。ちなみに、女性解放の否定的側面ばかりを挙げて嘆いているように見えるモンテイエにかかれば、登場する女性はいずれもずる賢く、不

道徳で、強欲で、攻撃的な悪女ばかりである。いや、この小説は悪に満ち満ちているとあってよい。『クォ・ヴァディス』では「清冽な流れに迷いをすててとびこんだ³¹⁾」ような主人公ヴィニキウスの回心が明快に提示されているのに、モンテイエはなにをどのようなかたちで示したのだろうか。

カエソは義母との背徳の愛から逃れるために莫大な財産と高貴族の身分の相続をあきらめ、ネロの倒錯した性の要求から逃れるために皇帝の寵遇を失い、不幸な境遇にある不感症のユダヤ人女奴隷を心から愛し、彼女を救うために命を賭して闘技場の砂場に立つ。父と義母は次々に自殺し、思慕する女性は去り、天涯孤独となった形式上のキリスト教徒カエソはのちの殉教者ペテロとともに獄中で処刑を待つ運命となる。結局、カエソの不幸はことごとく、墮落した社会でひとり背徳から逃れようとしたことが原因だったのである。そして、カエソが斬首される直前、「今朝はずいぶん楽しそうじゃないか」と話しかける処刑人に彼が言った「これから『父』と再会するからですよ³²⁾」という台詞にこだわれば、ここにわが主人公の回心の暗示をみないわけにはいかない。彼は熱病で一度冥界をさまよったとき、パウロによって蘇えらされる前に、イエスの幻を見ているからである。

モンテイエはすでに見たように敬虔なカトリックであり、彼の多くの作品には宗教色が濃厚に表われている。彼が『クォ・ヴァディス』に触発されて書いた『ネロポリス』においてキリスト教時代の曙を高々と謳い上げなかったのは、それが彼が現代のフランスにキリスト教的倫理の衰退をみ、その危険を警告するために選んだ方法だったからである。『ネロポリス』の中でキリスト教の教義の非合理性が手厳しく指摘され、戒律がさんざんに揶揄されているがゆえに、カトリック国フランスの現代社会でキリスト教的倫理がいかにか軽視されているかがそれだけ説得的に示されているのである。

モンテイエは徹底して偽善を嫌う皮肉屋で、毒舌家で、ユーモリストではあるかもしれないが、決して懐疑主義者でもニヒリストでもない。彼はこう語る。「さすがに子供をごみと一緒に捨てることこそなくなったが、育児は放棄するし、墮胎は横行する。ポルノと賭博には夢中になる。偉大な人物に対する畏れを知らない。少数派を抹殺するし、暴力のための暴力を好む。宗教心はいえ、形式や文字を嫌って、もっぱら東洋の方を向き、内面化するばかりだ。わたし自身は、イエスの復活を確信して微動だにしない³³⁾」。

む す び

現代のように価値観が多様化し、高度に情報化された社会においては、出版された1編の小説が一民族全体を鼓舞する大きな精神的影響力となることは希であろう。まして、それが個人主義の国フランスであれば、なおさらである。『ネロポリス』と『クォ・ヴァディス』との優劣比較をすることは無意味でもあり、本稿の目的でもない。筆者はただ、ユベール・モンテイエという、それまで推理作家としてのみ知られていた作家が、4年の準備期間を経て、毎日18時間の執筆、1年間で書き上げた長編歴史小説が、さまざまな先入見や批判にもかかわらず、フランス文学史上に残る傑作であることを論証しただけである。

実際、いかにきわどい描写や悪ふざけともとれる冗談があろうとも、『ネロポリス』はすぐれた文学作品である。Magazine Hebdo におけるラシェ (Guy Rachet) の次のような要約を引用して本稿の結びとしたい。「ユベール・モンテイエは古代に関する驚くべき学識により、ローマの暦や魚汁の作り方について語る ときでさえ、教育的であると同時に楽しい読み物を提供して決して飽きさせない。アテナイの小商人たちを観察するバルザック (Honoré de Balzac) やソクラテス (Sokrates) もかくやと思わせる。なによりも、この著者は文体と、明晰と、優雅について天賦の才に恵まれている。わたしはそれを古典的というよりアッティカの洗練と呼びたい。ときには破格ともいえる辛辣さと、きわどい言葉を遣いながら決して卑猥ではないからである。……これは歴史小説史に一時代を画す記念碑となるであろう³⁴⁾」。

ユベール・モンテイエ著作リスト

Les Mantes religieuses (Editions Denoël, le Grand Prix de la littérature policière 1960)
Le Retour des cendres (Editions Denoël, 1961)
Les Pavés du Diable (Editions Denoël, 1963)
Le Forçat de l'amour (Editions Denoël, 1965)
Les Bourreaux de Cupidon (Editions Denoël, 1966)
Devoir de vacances (Editions Denoël, 1967)
Le Cupidiable (Editions Denoël, 1967)
Andromac (Editions Denoël, 1968)
De quelques crimes parfaits (Editions Denoël, 1969)
Meurtre à loisir (Editions Denoël, 1969)
Non sens (Editions Denoël, 1971)
Requiem pour une noce (Editions Denoël, 1973)

Pour deux sous de vertu (Editions Denoël, 1974)
Mourir à Francfort (Editions Denoël, 1975)
Esprit es-tu là? (Editions Denoël, 1977)
Rome n'est plus dans Rome (Jean-Jacques Pauvert, 1977)
Retour à zéro (Editions Denoël, 1978)
Un métier de fantôme (Nathan, 1978)
Le Procès Filippi (Editions Denoël, 1980)
Les queues de Kallinaos (Pauvert/Ramsay, 1981, le Grand Prix de la littérature fantastique d'Avorias 1982, le Prix de la Société des Gens de Lettres 1982)
Gus et les Hindous (Nathan, 1982)
Les derniers feux (Julliard/Pauvert, 1982)
Gus et Poussinard (Nathan, 1984)
Néropolis—roman des temps néroniens (Julliard/Pauvert, 1984)
La Perte de vue (Editions Denoël, 1985)
Gus et le cambrioleur (Nathan, 1985)
La Pucelle (Editions de Fallois, 1988)

注

- 1) 野口雄司「訳者あとがき」、モンテイエ、P.『愛の囚人』(早川書房, 1967), p.134.
- 2) 同上, p.135. () 内は筆者.
- 3) 三輪秀彦, 石川喬司, 稲葉明雄, 小鷹信光, 長島良三「座談会: セバスチャン・ジャプリゾ, ユベール・モンテイエ, シャルル・エクスブライヤについて」『世界ミステリ全集15』(早川書房, 1973), p.427.
- 4) 同上, pp.426—427. () 内は筆者.
- 5) “Etant jeune marié et ayant besoin de mieux gagner ma vie, j'ai décidé d'écrire un roman. Un policier parce que cela me paraissait plus facile...”, Pauwels, M.-C., “Sept jours pour lire”, *Figaro Madame*, le 8 septembre 1984.
- 6) “En fait, ...si, vers trente ans, je me suis mis à écrire des romans policiers, c'est par prudence. Je voulais évaluer, pour reprendre une formule stendhalienne, mon <tirant d'eau.>”, Valloire, F., “La Santé de Monteilhet”, *Valeurs Actuelles*, le 10 septembre 1984.
- 7) “Hubert Monteilhet, enfermé un peu trop hâtivement par la critique dans les qualificatifs d'aristocrate du roman policier, de créateur de récits courts, secs et insolents. Bref, le <policier>

- façon Nimier.” 同上。
- 8) “Ce coup d’essai-coup de maître, qui l’a aussitôt catalogué dans la série auteur policier, l’agace un peu. Car ses <polars> tant par leur écriture que les époques où ils se situent tiennent autant du roman historique que fantastique.”, Pauwels, M.-C., “Sept jours pour lire”, *Figaro Madame*, le 8 septembre 1984.
 - 9) Guth P., “La gloire d’une ville”, *La Voix du Nord*, le 8 septembre 1984.
 - 10) “Nous allons ainsi d’étonnement en surprises. C’est inattendu et superbe...”, Vandrome, P., “Inattendu et superbe”, *Le Rappel*, les 29/30 septembre 1984.
 - 11) “Je me suis enfoncé dans *Néropolis* en sachant presque, par avance, ce qui m’y attendait. Et pourtant, j’ai été surpris, secoué, ballotté...”, Quintrec, C. Le, “Une fresque qui serait l’œuvre d’un titan...”, *Ouest-France*, le 12 octobre 1984.
 - 12) “《Voici un livre de taille et de poids...》”, Bonnier, H., “Les derniers jours de l’antiquité”, *Le Méridional*, le 9 septembre 1984.
 - 13) “...les références à l’Histoire, et les détails sur la vie quotidienne à Rome au 1^{er} siècle de notre ère, soient particulièrement exacts (ceux-qui-savent l’ont dit et je les crois volontiers)...”, Bernstein, M., “Hubert Monteilhet. A Rome comme les Romains”, *Libération*, le 15 novembre 1984.
 - 14) “Tout est mis en place conformément à celle-ci (la vérité historique). Les monuments de la Rome néronienne sont correctement situés sur le plan de la ville; on voit par les fenêtres ce que l’on doit voir, selon l’orientation. Les jardins d’Agrippa, au Champs de Mars, ne sont-ils pas un peu grands? Mais les travaux de F. Coarelli ont montré, récemment, qu’ils étaient plus vastes qu’on le pensait.”, Grimal, P., “Le monde joyeusement absurde d’Hubert Monteilhet”, *Le Monde*, le 28 septembre 1984. () 内は筆者。
 - 15) 弓削達「週刊文春」1988年7月28日, p. 130. () 内は筆者。
 - 16) “Il aurait été convenable...d’imaginer Monteilhet enseignant au département d’histoire antique d’Oxford avec un drôle de petit chapeau sur la tête.”, Bege, J.-F., “Une Somme”, *Sud-Ouest Dimanche*, le 2 septembre 1984.
 - 17) “...ce moderne Salluste travaille comme il mange: avec une sensualité inouïe, une gourmandise qui s’applique à la fois aux grimmoires de la Bibliothèque nationale et au rognon de veau.” 同上。
 - 18) Valloire, F., “La Santé de Monteilhet”, *Valeurs Actuelles*, le 10 septembre 1984.
 - 19) Leclercq, M., “Néron, c’est aujourd’hui”, *Paris Match*, le 28 septembre 1984.
 - 20) “《*Néropolis*...est né d’un extra-ordinaire ensemble de circonstances.》”, Valloire, F., “La Santé de Monteilhet”, *Valeurs Actuelles*, le 10 septembre 1984.
 - 21) “《J’ai toujours...été fasciné par le bien-être romain: cet épanouissement, cette dilatation de la nature humaine viciée par le péché originel...》”, Plunkett, P. de, “Hubert Monteilhet: Néron? Terriblement Actuel”, *Figaro Magazine*, le 1^{er} septembre 1984.
 - 22) “《Sienkiewicz, s’adressant à un certain public d’une certaine époque, a omis de traiter bon nombre de questions, pourtant très importantes pour comprendre la vie romaine: l’esclavage par exemple, ou la conception romaine du mariage. Sans parler de l’homosexualité, ou de la question juive.》”, Leclercq, M., “Néron, c’est aujourd’hui”, L’interview avec Hubert Monteilhet, *Paris Match*, le 28 septembre 1984.
 - 23) “《*Quo vadis?*》 développé, amplifié et libéré de la pudibonderie...”, Bondier, J., “Mort d’une société”, *Minute*, le 25 août 1984.
 - 24) “C’est un autre <*Quo vadis?*>, mais pas à la Sienkiewicz, pas christianisant, désabusé, sceptique, voire nihiliste.”, Madel, A., “Appeler police-secour?”, *Information juive*, octobre 1984.
 - 25) “Comme les <*Sainte-Victoire*> de Cézanne éclipsent toutes les autres reproductions de cette montagne, ainsi <*Vie et Destin*> de Vassili Grossman éclipse <*Guerre et Paix*>, et maintenant <*Néropolis*> éclipse <*Quo vadis?*>.”, Bruckberger, Le R. P., “La Rome de Néron”, *Le Figaro*, le 14 septembre 1984.
 - 26) 「シェンキエヴィチ」『世界伝記大事典4』(ほるぷ出版, 1980), p. 509.

- 27) 弓削達「週刊文春」1988年7月28日, pp.130—131.
- 28) “L’auteur et son éditeur veulent aussi voir dans ce pavé hétéroclite...un clin d’œil à notre aujourd’hui, où <nouveaux Nérons incendiaires> jouent <avec les atomes d’Epicure> et où, peut-être, l’Apocalypse est imminente...”, “Compte rendu des livres (par A.C.)”, *Les Echos*, le 4 septembre 1984.
- 29) “Pensez au football et à tous les sports, aux courses de chevaux et au tiercé, à tous les spectacles, au loto: nous sommes en train de renouer avec Rome!”, Leclercq, M., “Néron, c’est aujourd’hui”, L’interview avec Hubert Monteilhet, *Paris Match*, le 28 septembre 1984.
- 30) “«Aujourd’hui, les gens sont mal à l’aise, eux aussi. Le pécheur n’est pas gai! J’y vois le malaise fondamental de l’homme, qui a besoin pour respirer de faire appel à une dimension supérieure. Le christianisme pourra-t-il à nouveau apporter sa réponse? Ce sera difficile, car pour le moment les gens ne veulent plus de la morale chrétienne: la crise en est d’autant plus grave.»” 同上.
- 31) 弓削達「週刊文春」1988年7月28日, pp.130—131.
- 32) “«C’est que je vais retrouver mon Père!», Monteilhet, H., *Néropolis—roman des temps néroniens*, Paris, Julliard/Pauvert, 1984, p.736.
- 33) “«On n’expose plus les enfants, on les abandonne et on pratique l’avortement; on se vautre dans la pornographie et dans les jeux; on défie l’homme providentiel; on extermine les minorités; on aime la violence pour la violence. Et, sur le plan religieux, on s’orientalise, on intériorise par dégoût de la forme et de la lettre. Quant à moi, je suis absolument certain de la résurrection de Jésus.»”, Valloire, F., “La Santé de Monteilhet”, *Valeurs Actuelles*, le 10 septembre 1984.
- 34) “La prodigieuse culture antique d’Hubert Monteilhet lui permet d’être en même temps didactique et distrayant, jamais ennuyeux, même quand il parle du calendrier romain ou de la manière de fabriquer le garum. Il y a là du Balzac ou du Socrate qui observe les petits métiers d’Athènes. Et, surtout, l’auteur a la grâce d’un style, d’une clarté, d’une élégance que je ne qualifierai pas de classique mais d’attique, avec néanmoins ce piquant qu’apportent certaines licences, l’emploi de termes crus, mais jamais vulgaires...c’est un monument qui fera date dans l’histoire du roman historique.”, Rachet, G., “Néron, Pétrone, Sénèque et les autres...”, *Le Magazine Hebdo*, le 14 septembre 1984.

参考文献

- 1) Mouret, J., “Dix-neuf siècles plus tôt...”, *Paris-Normandie*, le 21 septembre 1984.
- 2) Vernon, M., “Vive la grande tradition!”, *Var Matin*, le 28 septembre 1984.
- 3) Bourin, A., “Envoutant! Epoustouflant!”, *Le Journal Rhône-Alpes*, le 25 octobre 1984.
- 4) Rousseau, F.O., “Monteilhet chez Néron”, *Le Matin*, le 8 novembre 1984.
- 5) David, J., “Un monument habité”, *V.S.D.*, le 23 août 1984.
- 6) Gripari, P., “Une Rome fort peu conventionnelle”, *Ecrits de Paris*, septembre 1984.
- 7) Flacon, M., “Rome antique: Quel cirque!”, *Le Point*, le 10 septembre 1984.
- 8) Wagner, G.P., “Hubert Monteilhet, Néropolis—roman des temps néroniens”, *Présent*, le 31 août 1984.
- 9) Villeneuve, M., “Sous Néron, c’est le bon temps...”, *France-Soir*, le 28 août 1984.